



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	各附属学校・園の研究内容(研究年報)( fulltext )
Author(s)	東京学芸大学附属学校研究会
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 37: 211-223
Issue Date	2010-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/107486">http://hdl.handle.net/2309/107486</a>
Publisher	
Rights	

## 【Ⅱ】 各附属学校・園の研究内容

# 「子どもとともにつくる学校」の創造

— 子どもたちが学び続ける原動力を探る —

附属世田谷小学校

### 1. 研究主題について

本研究主題に取り組んで、本年度は3年次研究の3年目にあたる。研究のまとめとして昨年度の研究副主題「子どもたちが学び続ける原動力を探る」を引き継ぎ、研究を推進することとした。

### 2. 本年度の研究内容与方法

#### 2. 1. 研究内容

昨年度の研究において、教科学習活動・生活実践活動・総合学習活動の3領域における子どもたちの学び続ける原動力とそのため教師の手だてを明らかにすることを試みた。本年度はその原動力と教師の手だての検証を各教科・領域において試みることを、そしてそれらを支える教師集団の力量形成に向けた諸会議の充実を図ることの2点を重点化し研究を推進することとした。

#### 2. 2. 研究方法

- ・各教科・領域における授業研究
- ・生活情報交換会、学年会・学年主任会等の位置づけの明確化と運営
- ・生活実践活動、総合学習活動の2領域におけるプロジェクト研究
- ・以上の研究成果の発表（研究発表会の開催）

### 3. 本年度の研究の概要

- ・校内研究会において、前述した昨年度の研究成果に基づく各教科・領域における「学び続ける原動力」と教師の手だての仮説を立て、授業研究を通して検証、修正を試みた。
- ・各会議の充実に向け、「子どもの姿」を通じた本校教育活動の現状把握を行い、課題解決に向けて論議を進めた。
- ・プロジェクト研究では前年度の研究成果にもとづき、「子どもの姿」を各領域の指導計画に反映できるように実践を通して記録化し加筆修正を試みた。

### 4. 本年度の研究成果と課題

#### 4. 1. 成果

- 「子どもたちが学び続ける原動力」としての「真の問題の顕在化」を生み出す場面や教師の手だて
  - ・「概念崩し」 ・「素朴概念のゆさぶり」 ・「問い直し・問いの練り上げから学習問題をつくる」
  - ・「問いの更新」 ・総合学習・生活実践活動との関連 ・学びにおける学習感想・学習履歴の重要性
  - ・学びにおける「他者」の存在の重要性

#### ○授業研究と教師集団の成長

- ・コメントカードの記述に見られる授業記録の充実と議論の活性化

#### 4. 2. 課題

- ・「学び続ける子どもの姿」の追究と実践の積み重ねによる教育課程の充実
- ・「学び続ける子ども」を支える教師の実践的力量形成に向けた研究の方向性

(文責 内田 雄三)

# 求め合い、つなげ合い、学び合う子

— 吟味のある授業を求めて —

附属小金井小学校

## 1. 研究主題について

昨年度までの研究で「求めあい、つなげあい」の姿を追究していく中で、形としてつなげ合っても学習としての高まりや深まりが足りないのではないかと、より質の高いつなげ合いが生まれるよう、指導法や教師のかかわり方などを工夫する必要があるのではないかと、という課題が残った。そこで「質の高いつなげ合い」をする姿を「学び合い」の姿ととらえ、研究主題に文言として位置付けて、より明確に研究の方向性を示すことにした。

本校の考える「学び合い」は「求め合い」「つなげ合い」と別にあるのではなく、質の高い「求め合い」「つなげ合い」の中で生じるものである。授業の中で学習の目的に即した「求め合い」「つなげ合い」が効果的に行われた時、そこに「学び合い」が生まれるのである。

では、「学び合い」となる質の高いつなげ合いを生むためには、何が必要なのだろうか。個々が「受容」したものを「表現」する前にどのような「吟味」をしたのかが問われるのではないかと考え、この「受容→吟味→表現」のプロセスにおける「吟味」を充実させることに焦点を当てることにした。具体的には、「吟味」を生むための既習事項や生活経験などの要素とそこからの類推、関連付け、反例、想像、創造などの手だてを探ってきた。

## 2. 研究経過

月	日	研究会の主な内容
4	16	第1回研究会（今年度の研究について・研究計画・全体研究の方向）
5	14	第2回研究会（テーマ研究・会計予算・研究授業予定・年間指導計画など）
	21	第3回研究会（各教科部の研究計画提案・テーマ研究分科会協議）
6	18	第4回研究会・研究授業・協議①国語部 講師：廣川加代子先生（東京学芸大学講師）
7	2	第5回研究会・研究授業・協議②算数部 講師：中村光一先生（東京学芸大学教授）
	17	第6回研究会（夏の研究会についての確認・研究出張報告）
8	26	夏の研究会①講演Ⅰ 村瀬公胤先生（麻布教育研究所）
	27	②講演Ⅱ 橋本創一先生（東京学芸大学准教授）
	28	③講演Ⅲ 吉崎静夫先生（日本女子大学教授）
9	10	第7回研究会・研究授業・協議③理科部 講師：村山哲哉先生（文科省教科調査官）
10	7	第8回研究会（授業セミナー提案・英語部・特別活動部提案検討）
11	5	第9回研究会・研究授業・協議④道徳部 講師：永田繁雄先生（東京学芸大学教授）
12	3	第10回研究会・研究授業・協議⑤社会科部 講師：廣嶋憲一郎先生（聖徳大学教授）
	22	第11回研究会（授業セミナーに向けて・研究紀要・研究著書・研究出張報告）
1	21	第12回研究会・研究授業・協議⑥体育部 講師：鈴木秀人先生（東京学芸大学准教授）
2	5	第4回KOGANEI授業セミナー 公開授業14本、12協議会、講師10名
3	4	第13回研究会（今年度の研究評価、来年度へ向けて）
	19	第14回研究会（会計報告・次年度引き継ぎ事項確認・研究出張報告）

校内研究授業は外部公開した。また上記以外にも部内授業を行い、全教員が研究的な公開授業に取り組んだ。

## 3. 研究の成果と今後の課題

既習事項や生活経験に着目して子供の学びをとらえ直した時、より質の高いつなげ合いに至るための具体的な手だてが見えつつある。しかしながら、その手だてを未だ整理・系統化できていないことが課題と言えよう。

# 国際社会に生きる豊かな学力の育成

「海外生活体験児童と一般学級児童との共生をはかる学校体制の整備」  
～互いを認め合って、共に学べる学校体制とカリキュラム構築～

附属大泉小学校

## 1. 海外帰国児童学級40周年の歩み

本校の国際学級「ゆり組」は、昭和44年、全国で初めて公立小学校に「海外帰国児童（当時は子女）教育学級」として開設された。開設当時より、海外で長く生活し日本語で学校生活を送ることが困難な児童が、緩やかに日本の学校生活に適応するための教育を大きな使命として取り組んできた。本年度は、その開設40周年に当たる。

## 2. 研究主題について

こうした歩みの中、本校は4年前より大泉地区全体の国際学校構想と連動し、研究テーマに「国際社会に生きる豊かな学力の育成」を掲げ研究を進めてきた。「国際化する社会の中でも、主体的に対応し活躍できる人材を育成する」という教育理念のもと、国際社会の中で求められる人間として「自分の個性を發揮し、互いのよさを認め合い、より豊かな生活を築いていく力」を児童に身につけさせたいと考えた。海外帰国児童教育学級開設40周年を迎えるにあたって、本年度の研究主題を「海外生活体験児童と一般学級児童との共生をはかる学校体制の整備～互いを認め合って、共に学べる学校体制とカリキュラム構築～」とし、本校がこれまで海外生活経験児童と一般学級児童のよりよい関係づくりを目指してきた歩みを更に大きく前進させたいと考えた。

## 3. 研究の取り組み

今年度は、コミュニケーション力を大きな軸とし、本校の国際学校構想の中でめざす「多文化理解」「思いやりとたくましさ」「解決力・実践力」の視点から、国際社会に生きる豊かな学力を3つの児童像で表した。そして、次の3つの分科会を組織して、研究を進めていった。

### (1) 個別学習分科会（国際児童を学校生活に適応させていくための研究を担う）

国際学級児童が安心して学校生活に適応し、確かな力をつけるために、新たな個別学習プログラムの開発、国際学級児童の学習適応や生活適応をみとる個人カルテの開発、さらに一般学級児童と一緒に学ぶ際のフォローアップを行う取り出し個別学習の開発をめざした。

### (2) 混入授業分科会（一般学級児童と国際学級児童の両者が学びを深めていく研究を担う）

本校がめざす混入授業は、「国際学級児童が学習言語の習得が十分でなくても参加できる授業」、「国際学級児童の海外生活経験が活かされ、一般学級の児童との学び合いで、多面的なものの見方・考え方にふれることができる授業」であり、国際学級児童と一般学級児童の両者にメリットのある授業をめざした。

### (3) 菊の子・心の学習分科会（国際社会に生きる「より良い関係を築く力」を育むカリキュラムの検証を担う）

国際社会で生き抜いていくには、いろいろな立場や考えをもつ人たちと積極的にコミュニケーションしようとする意識・態度をもち、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを受け入れたりして、チームで行動していくことができる資質や能力が大切である。学習内容を「人との関わり」に絞りカリキュラムの検証・開発をめざした。

## 4. 本年度の研究の成果と今後の課題

(成果)・日本語力判定と生活力との総合的な評価体系、取り出し個別学習や新「日本語」の取り組み

・ワークシートの工夫やTT指導を導入した混入授業の授業展開の検討

(課題)・菊の子学習の交流単元における新単元の開発や授業内容の改善

(文責：森下準司)

# 平成21年度 研究報告

附属竹早小学校

## 1. 今年度の研究

竹早地区連携研究として「主体性を育む幼・小・中連携の教育～実践に基づく連携カリキュラムの構想～」を研究主題に取り組んだ。校種を越えてお互いの実践をひらきながら、連携カリキュラムづくりに重点を置いた。11月に開催した公開研究会では、幼・小・中合わせて23本の公開保育・活動・授業を行ったほか、現在できたところまでの連携カリキュラムを示した。また、校内研究会では、幼・小・中連携研究のほかに、幼・小だけの枠組みで9本の研究授業も実施した。

## 2. 連携研究の内容

### 2. 1. 連携研究の組織と活動内容

- (1) 連携委員会：発達研究と実践研究をつなぎながら幼・小・中連携研究の方向付けを行った。
- (2) 発達研究部会：「理論研究分科会」「事例研究分科会」「調査研究分科会」の3分科会体制
  - ① 4歳児から中学3年までの11年間の成長に見られる特徴的過程を大きな4つのステージと小さな8つのステップととらえた「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」の表を見直した。
  - ② 中学3年生で特に主体性を発揮している子どもの事例研究、および園児、児童、生徒の変容の継続的な調査研究データをまとめ、公開研究会では紙面発表した。
- (3) 実践研究部会：「幼小接続分科会」と「小中接続分科会（さらに6グループに分化）」の2分科会体制
  - ① 縦軸に時系列として「ステージ・ステップ」をおき、横軸は教科・領域ごとに特性の表れた内容軸を置いて、連携カリキュラムづくりを行い、現在作成作業が進んできている。
  - ② ふだんの授業実践や公開研究会での協議をもとに連携カリキュラムの検証、修正作業を行った。

### 2. 2. 連携研究研修の日程と内容

- (1) ワークショップ 7/21 幼小中全教員によるステージ・ステップの見直し  
助言：三石初雄先生（東京学芸大教授）
- (2) 授業研究会 6/10 浅見優子（国語） 講師：多田孝志先生（目白大学教授）  
山田剛史（算数） 講師：中村光一先生（東京学芸大学教授）  
佐川勝史（理科） 講師：森本信也先生（横浜国立大学教授）  
権 安珠（音楽） 講師：猶原和子先生（お茶の水女子大学附属小学校教諭）  
7/10 中学校提案授業の協議会に参加

## 3. 幼小校内研究会

本校の校内研究会は、個人の力量アップを目指す研修の場、個人の研究成果の発表の場として行われる。また、竹早地区の連携教育推進を図るために、研究授業、研究協議会には、中学校の教員が参加することもある。

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 第1回（6/8）佐川 勝史（理科）  | 第2回（6/16）朝蔭恵美子（総合） |
| 第3回（6/25）古谷 理恵（総合） | 第4回（6/29）山田 剛史（算数） |
| 第5回（9/10）清水 大（社会）  | 第6回（9/29）森田 潤一（生活） |
| 第7回（12/8）関 正浩（算数）  | 第8回（1/29）堀口 純平（体育） |
| 第9回（2/10）桐山 卓也（図工） |                    |

## 4. 成果と課題

連携カリキュラムづくりを通して、幼・小・中の教員が校種を越えてますます交流が深まり、めざす子ども像や授業観、教材観などを共有できた。しかし、連携カリキュラムは作成途中である。日々の実践を積み重ね、修正を加えながら完成を目指している。（文責：関 正浩）



# 平成21年度 研究報告

附属世田谷中学校

## 1. 研究の概要

平成19年度より「一人ひとりの主体性、関連性、社会性を高める中学校教育課程の実践的研究」のテーマのもとに研究を進めており、今年度はその3年次の研究を行った。今年度は「社会性」を重点テーマとして「体験を生かし、社会生活に生きる学びを育む教育課程の研究」を行うとともに、3年間の研究の成果を発表するために、11月14日（土）に公開研究会を行った。また、この研究の中で検討し、昨年度に作成した、新学習指導要領に対応した新カリキュラムの平成23年度完全実施に向けて、本年度より移行措置としてのカリキュラムを実施した。

## 2. 研究の内容と経過

### 2. 1. 公開研究会

公開研究会では全体会、公開授業、各教科別協議会を行った。各教科の研究主題は以下に示す通りである。

	研究主題
国 語	学び合う教室の創造 ～「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の実際～
社 会	共生のために行動できる生徒の育成を目指す授業の創造
数 学	興味・関心を高め、数学的に考える力を育む指導
理 科	科学の基本的な見方や概念を獲得するための教科拡充型の学習を取り入れた教科カリキュラムの開発
音 楽	各領域・分野の密接な関連を意識したカリキュラム開発 ～特に鑑賞での学びを活かした器楽（創作）活動を念頭に～
美 術	生徒が主体的に取り組む学習題材の工夫
保健体育	新学習指導要領で育てたい実践力・活用力
技術・家庭	学び合い主体的な力を育む実技指導
英 語	国際舞台で活躍するための基礎的な資質と能力を育む英語指導 ～授業集中型カリキュラム6-3-3からの発展～

### 2. 2. 授業研究会

今年度は公開研究会があったため、3学期にのみ1回（英語科）を行った。

### 2. 3. 校内教員研修会

本年度は「学校の危機管理」について東京学芸大学教授の渡辺正樹先生に講演をお願いし、研修を行った。

### 2. 4. 現職教員研修

夏と春の長期の休暇中に国語科、数学科、英語科、理科等の教科が、現職の公立、私立の先生方を対象に教科の教育についてセミナーを行った。

### 2. 5. 社会貢献

現職研修・短期研修の場として、各教科に全国から多くの教員が来校し、授業を参観したり、本校の研究の成果を各学校へ持ち帰っていただいた。

## 3. 成果と課題

公開研究会では、新カリキュラムと各教科の研究に賛同を得ることができた。来年度は、今年度までの研究を踏まえて、あらたな主題を設定して研究を進めることになる。

（文責：研究部長 小菅敦子）

# 2009年度 研究活動報告

附属小金井中学校 (文責 栗田克弘)

## 1. 本年度の研究活動について

昨年度(2008年度)は、「学びあいをうながす指導と評価」の研究活動を受け、新学習指導要領に基づいた新しいカリキュラム研究の基礎研究を行うことを目的とした。本年度はこの基礎研究を受け、さらに本校の研究活動を通して検討し、以下のように研究主題を設定した。

研究主題 「課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程づくり」  
～学び合いを通して見つける価値ある学びとは～

さらに、本年度は主題研究の三年計画の第二年次にあたる。

2008年度 「教育課程の基礎研究」～「授業における試行的な取り組み」

2009年度 「授業での実践研究の定式化」～「実践研究の深化」

2010年度 「研究協議会にて成果を発表」

## 2. 公開授業研究会

### 2. 1 主題研究を受けて、公開授業研究会を11月21日(金)に実施した。

[公開授業研究会の各教科の協議主題等]

- ・国語(田中成行、松原洋子)「学び合いを通して自らの問いを深める～竹取物語、おくのほそ道」  
司会者:石井健介(附属竹早中)、助言者:石井正巳(東京学芸大学)
- ・社会(平田博嗣、伊東聡)「学び合いによる概念形成をめざす社会科の指導～伝統文化の継承について」  
司会者:荒井正剛(附属世田谷中)、助言者:木村茂光(東京学芸大学)
- ・数学(樺沢公一)「課題意識を高め必要感をもって証明する図形の論証指導～図形の性質と証明」  
助言者:中村光一(東京学芸大学)
- ・理科(村上潤)「学び合いを通し、生物とは何かを問う理科の授業について～島の自然環境、薩摩藩による琉球・奄美侵略 400年を教材化する～」  
司会者:三井寿哉(附属小金井小)
- ・美術(大根田友萌)「自然物のかたちを生かした造形について～自然のかたち 自分のかたち」  
司会者:栗田勉(附属世田谷中)、助言者:相田隆司(東京学芸大学)
- ・保健体育(谷口善一)「体育科授業におけるグループ学習について～一人ひとりの特徴を生かす学び合い」  
司会者:長見真(仙台大学)、助言者:鈴木秀人(東京学芸大学)
- ・技術・家庭(佐藤麻子)「自己への問い」を通し幼児とのかかわりを深める指導～相手の思い、自分の思いをどのように伝えるか」  
助言者:大竹美登利(東京学芸大学)
- ・英語(青柳有季)「学び合いを促す指導の工夫(4)～日本文化の情報交換」  
助言者:金谷憲(東京学芸大学)
- ・学び合い(栗田克弘)「学び合いを通し、生徒の課題意識を高め自らの問いを深める授業について」  
助言者:滝川洋二(東京大学)

以上の11分科会において、授業が公開され研究協議がなされた。

### 2. 2 主題研究を受けて、校内研究授業を実施した。

主題研究を進めるにあたり、四つの分科会(①「学び合い」から論理的思考力や抽象的思考力の育成のために課題意識を高める②「学び合い」から表現活動につながる力を育成するために課題意識を高める③「学び合い」を通して、授業の内容を元に学習の意義を理解する=自己への問いを深める④「学び合い」(集団や教師の役割)を通して見出していく自己への問い=自己への問いを深める)を設定した。分科会ごとに、校内研究授業を実施した。11月数学(樺沢公一)、1月技術・家庭(葉山盛雄)、2月保健体育(谷口善一)、3月国語(森顕子)である。

# 平成21年度 研究報告

附属竹早中学校

## 1. 今年度の研究

竹早地区連携研究として「主体性を育む幼・小・中連携の教育－実践に基づく連携カリキュラムの構想－」を主題に研究に取り組み、11月14日（土）に合同公開研究会を実施した。本地区における連携研究は、中期目標・中期計画と連動して今年度が区切りの年であった。平成19年度までの研究では、校種間の接続における問題の解決に取り組んできた。これまでは、教科の枠にとらわれずに連携カリキュラムの構造を検討してきたが、平成20年度以降、具体的なカリキュラム作成に向けて、教科・領域の視点を中心に連携カリキュラムを作成してきた。今年度、それをまとめ、試案として提案した。同時に、平成24年度には、全ての教科・領域の内容を網羅した連携カリキュラムを完成することを確認した。

## 2. 研究の内容

### 2. 1. 連携研究の組織と活動内容

連携委員会を中心に、2部会体制で研究を進めた。それぞれの研究内容は、次のようである。

- (1) 連携委員会：発達研究と実践研究をつなぎ、研究の全体構想をまとめるなど、連携教育の研究を推進した。
- (2) 実践研究部会：幼小接続分科会と小中接続分科会（更に6グループに分化）の2分科会体制で取り組んだ。
  - ①各発達の段階に見られる子どもの変容とそれを支えるための具体的な方策を検討した。
  - ②幼小中11年間を見据えた各教科・領域における連携カリキュラム研究をグループ毎に取り組んだ。
- (3) 発達研究部会：理論研究分科会と事例研究分科会、調査研究分科会の3分科会体制で取り組んだ。
  - ①11年間を見据えた4ステージ、11ステップについて、最近の子どもの現状を踏まえて見直した。
  - ②抽出園児・児童・生徒に見られる変容から、園児・児童・生徒の指導に対する具体的方策を検討した。
  - ③11年間4ステージを見据えた生活指導の連携と具体的方策を実施・検討した。
  - ④園児・児童・生徒の11年間の個人データ作成と共有化が課題であることを確認した。

### 2. 2. 校内研修

幼小中連携研究の中に位置づくワークショップ、講演会、3回の授業研究会を行った。

- (1) 夏期集中研修会 7月21日 ワークショップ、講演 三石初雄（東京学芸大学）  
テーマ：「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」の再検討
- (2) 授業研究会

	教科等	授業者	講師	教科等	授業者	講師
6月10日	技術	浦山浩史	松本誠之（文京区立第三中学校）	家庭	阿部睦子	倉持清美（東京学芸大学）
7月10日	国語	石井健介		社会	上園悦史	大澤克美（東京学芸大学）
	数学	小岩大	中村光一（東京学芸大学）	理科	鈴木一成	森本信也（横浜国立大学）
	音楽	居城勝彦	猶原和子 （お茶の水女子大学附属小学校）	健康	五十嵐由美	相川 充（東京学芸大学）
10月23日	技術	浦山浩史	松本誠之（文京区立第三中学校）	家庭	阿部睦子	倉持清美（東京学芸大学）
	数学	小岩大	中村光一（東京学芸大学）	理科	鈴木一成	森本信也（横浜国立大学）
	保体	原 信一	松田恵示（東京学芸大学）	音楽	居城勝彦	猶原和子 （お茶の水女子大学附属小学校）
	総合	横山 晶	松尾直博（東京学芸大学）	外国語	芝田千香子	馬場哲生（東京学芸大学）

## 3. 成果と課題

幼稚園・小学校・中学校の校種間接続から、教科・領域に視点を移して幼小中連携カリキュラムを検討し、成果を試案として発表した。また、「小学校低学年（幼小接続の部分）における合科的な活動から教科・領域の活動にいかにして接続させていくか」ということが新たな課題（平成22年度）として確認された。

（文責 小野瀬 倫也）



# 2009（平成21）年度 研究活動報告

附属高等学校

## 1. 第9回 公開教育研究大会の開催 平成21年11月7日（土）

研究主題 『新教育課程における課題と展望 —思考力・判断力・表現力を育成するために—』

講演 新学習指導要領をめぐる議論について—知識の吸収から活用へ— 東京都教育委員会委員長

木村 孟氏

## 2. 研究紀要第47号

数学	祖慶 良謙	LaTeXの使用例
公民	古山 良平	人口問題及び南北問題のノート
保健体育	上原 信子	コンディショニングノートを通してみた学習成果
教育工学委員会	教育工学委員会	Turning Pointを活用した双方向授業の実現 —能動的学習者の育成を目指して（2）—
芸術（工芸）	尾澤 勇	教育実習生による題材開発の実践—美術・工芸教員養成の方法—
支援委員会	支援委員会	高等学校における「発達障害支援」の具体的な取り組み
国語	鈴木 芳明	高校生に伝えたい吉野秀雄の歌（その二）

## 3. 第51回 全附属高等学校部会教育研究大会における発表 平成21年10月23日から24日

Turning Pointを用いた化学の授業

—授業の能動性と改善を目指して— 坂井 英夫（理科）

コンディショニングノートを通してみた学習効果 上原 信子（保健体育科）

教えることとサポートすること

～登下校時のマナー指導から見えてくるもの～ 林 正太・浅田 孝紀・栗山 絵理（生徒指導部）

## 4. 現職教員研修講座の開催

化学（理科）の教育現場における課題解決セミナー 平成21年4月～平成22年3月（月1回）

国語科の新しい授業づくりの視点

—国語力向上を図る学校カリキュラムに関する基礎的研究— 平成21年8月27日

地学科公開研究会 野外観察講座 平成21年10月30日

国立科学博物館・科学関係研究施設見学実習 平成22年2月4日

情報教育公開研究大会「新学習指導要領におけるメディア教育」 平成22年3月12日

## 5. 校内奨励研究

妙高施設委員会 校外施設の活用に関する研究（4）

## 6. 東京都立高校教員長期派遣研修の研究

・派遣期間 平成21年4月～平成22年3月 ・派遣者名 岩瀬 華子（国語・東京都立駒場高等学校）

## 7. 平成21年度 教育改善推進費（トップマネジメント経費）による「特別開発研究プロジェクト」

<支援委員会>

講演会：高等学校での支援推進について 平成21年7月8日

講演者：樋口一宗（文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育調査官）

松尾直博（本学教育心理学講座准教授・竹早中学カウンセラー）

研修会：「積極的な支援教育のために」松尾直博氏（臨床心理士・本学准教授） 平成21年5月25日

「不登校 教師のできることでできないこと」田村毅氏（精神科医・本学教授） 平成21年10月26日

「発達の偏りにあわせた教科と社会性の指導」高橋あつ子氏（早稲田大学大学院教職研究科准教授）

平成21年12月10日

<教育工学委員会>

Turning Point を活用した双方向授業の実現 —能動的学習者の育成を目指して—

# 2009（平成21）年度研究報告

附属高等学校大泉校舎

## 1. 目標

- (1) 特別支援教育委員会と連携を結び、生徒指導実践に直接反映できる視点を追求しながら研究をおこなう。
- (2) 「国際中等教育学校」と連携し、日本語指導や国際バカロレア（MYP）について研究を深める。
- (3) 授業の改善と校内の諸問題の解決に向けて、研究・支援活動を実施し、その成果を積極的に公表する。
- (4) 「自己点検・評価」システムを検討・改善する。

## 2. 本校における研究活動

### (1) 校内研究会

- 第1回（6月8日） 大泉地区附属学校の研究内容について（大泉地区附属学校合同研修会）
- 第2回（6月15日） 特別支援教育ワンポイント講習（提案者：特別支援教育コーディネータ）
- 第3回（11月9日） メンタルヘルス教育の必要性〔こころの病気を学ぶ授業（うつ病編）の開発〕  
（東京学芸大学産学連携開発教材）
- 第4回（11月9日） IB MYP パーソナルプロジェクトについて①（提案者：星野あゆみ）  
（国際中等教育学校共同研究会）
- 第5回（1月28日） IB MYP パーソナルプロジェクトについて②（提案者：MYP委員会）  
（国際中等教育学校共同研究会）
- 第6回（2月25日） IB MYP PPと知的探究の運用について（提案者：MYP・総合的な学習）  
（国際中等教育学校共同研究会） 移行期の検討課題

### (2) 公開授業等

- 第1回（5月16日）：公開授業（公開授業数 21：第1～3学年対象）  
国語総合、国語表現Ⅱ、現代社会、世界史A、日本史A、地理A、憲法、数学Ⅱ、  
数学C、化学Ⅱ、地学Ⅱ、生物Ⅰ演習、リーディング、情報A
- 第2回（2月17日）：総合的な学習の時間「知的探究科」発表会（第1・2学年対象）

### (3) 研究紀要（第34集）の発行

- 「地震と変動地形に関する地学教材」 正木智幸（理科）  
「軽井沢という表記 クムという表記」 長瀬瑞己（国語）  
「修学旅行における農業体験 ～『遠野に求めるものと題して』～」 愛甲修子（国語）  
「地歴公民科における帰国生教育の成果と課題 ～学校設定科目の実践報告を通して～」  
佐々木智章・長谷川智大・藤木正史・山本勝治（地歴公民科）

## 3. 第51回全附属高等学校部会教育研究大会に参加

理科分科会・保健体育分科会・生活指導分科会・附属のあり方の分科会に 5名が参加

理科分科会発表 発表者：斎藤淳一

「国際生物学オリンピック参加をとおして－日本の生物カリキュラムは国際標準に達しているか－」

# 平成21年度 研究報告

附属国際中等教育学校

## 1. 研究の概要

東京学芸大学附属国際中等教育学校は開校3年目を迎え、「中等教育学校等における国際カリキュラムの開発による実践－外国人子弟等の小中高等学校等への受け入れ体制の整備」（特別教育研究経費）と「持続可能な開発のための教育（ESD）を視野に入れた国際中等教育学校のカリキュラム開発～MYP、教科連携と国際教養を中心として」というテーマのもと、新しいカリキュラムの検証を繰り返しながら日々の授業実践、研究活動を進めている状況にある。本年度はこれらに対応すべく研究推進に多くの時間を費やした。

## 2. 研究活動の内容

### 2. 1. 研究の実践

各教科、教科間連携、そして、国際教養における初めての3年生ワークキャンプ（国際理解コース、人間理解コース、理数探究コース）のための実践的研究を実施した。また、2010年1月に行われた国際バカロレア機構による公式認定訪問（IBOスクール・ビジット）のための研修・研究を実践し、2月には日本の国・公立学校としてはじめてIBスクールに認定された。

### 2. 2. 教員研修

MYPワークショップ参加（国内、海外）。

MYPを中心とした校内研究会、特に次年度から始まる4年生のパーソナル・プロジェクトに時間を費やした。

全国中高一貫教育研究会大会への参加。

### 2. 3. 帰国生徒教育研究

附属国際中等教育学校では帰国生徒や外国人生徒に対する日本語指導（JSL）を含めた実践的研究が推進された。

## 3. 大学、他機関との連携

本学と東京都教職員研修センターが連携を図った教員研修として、平成21年度専門性向上研修・JSLカリキュラムのための研究授業を実施した。

## 4. 成果と課題

本年度は初めて前期課程の3学年が揃い、横の連携から縦の連携が可能となり、国際バカロレア機構によるMiddle Years Programme（MYP）にも活用することができた。今後MYPについてはIBOスクール・ビジットの報告書を元に発展させる必要があることに加え、まだ国際中等教育学校の授業に直接関わっていない教諭への研修が大切である。また、平成22年度に実施予定の公開研究会に向けて、これまでの成果をわかりやすく整理する必要がある。

（文責：堀内 順治）

# 生涯発達支援学校としての授業実践

－豊かな人間関係をめざした授業づくり－

附属特別支援学校

## 1. はじめに

本校では、昨年度から研究主題を「生涯発達支援学校としての授業実践」に設定し、幼児児童生徒の「生涯発達支援」に対してどのような指導計画及び指導内容を立案していくかについて授業実践を積み重ねる中で検討してきた。今年度は、学習指導要領の改訂（自立活動の区分に「人間関係の形成」が新たに加わったこと）や特別支援教育に関わる社会的な情勢を鑑みて、副主題に「豊かな人間関係」を設定し、各学部において「豊かな人間関係」に繋がる指導計画及び指導内容について授業実践を積み重ねる中で検討を行った。

## 2. 研究の目的

生涯発達支援学校として、幼稚部から高等部までの継続的な支援について、今年度は豊かな人間関係に焦点を絞り、人間関係に繋がる指導計画や指導内容について、授業実践を積み重ねる中で検討することを目的とした。

### 2. 1. 幼稚部「幼児期の人間関係の発達を促す遊びの授業－人形遊びに着目して－」

幼稚部では、「課題遊び」の指導計画の中にふり・見立て遊びの内容を一領域として加え、その具体的な展開として「人形遊び」を試みた。人形遊びの授業実践を通して、幼児が人の社会的な行為や他者の気持ち等に関心を示すことにより、その後の友だちとのよりよい関わり方や接し方への効果について検証した。

### 2. 2. 小学部「子どもたちのコミュニケーションの充実をめざした授業づくりⅡ」

小学部では、学部全体授業「みんなであくしゅ」の指導計画について、同世代の仲間とより良く関わるための技能や態度を育むための、指導内容や支援方法の段階性から見直しを試みた。授業実践を通して、授業以外の場面における児童らの変化について検証した。

### 2. 3. 中学部「「豊かな人間関係」につながる指導内容の検討と授業づくり」

中学部では、「くらし」の指導計画について新設当初の指導計画を、個別教育計画の希望調査と今年度の指導計画の両側面から見直しを試みた。その際に、中学部段階における「豊かな人間関係」に繋がる指導内容を踏まえて、「くらし」の授業づくりを進めた。

### 2. 4. 高等部「高等部における人間関係に着目した授業づくり」

高等部では、社会生活に必要な知識を得て、生活にかかしていくことを目標としている「くらし」の生活知識分野を取り上げた。特に、高等部卒業後を見据えた学習内容の中にある社会生活に必要な人間関係の要素について、授業実践を通して指導内容や指導方法について検討を行った。

## 3. まとめ

今年度は「豊かな人間関係」に繋がる指導内容について、授業実践を通して各学部段階で必要な内容について示すことができた。今後は、さらに授業実践の積み重ねと指導内容の再考を繰り返し、「生涯発達支援」に必要な指導計画や指導内容を導きだすような研究を継続的に取り組んでいきたいと考える。

(文責：増澤貴宏)



# 今日から明日へつながる保育

附属幼稚園（小金井園舎）

## 1. 研究主題について

今年度、研究主題を「今日から明日へつながる保育」に設定し、研究を進めてきた。幼稚園教育要領の改訂では、体験の多様性と関連性を重視する項目や、社会的課題を受けて協同して遊ぶ経験を重視する項目が新たに加わった。そこで、体験の充実が幼児の発達に重要であることを踏まえ、幼児の実態の読み取りや、保育の構想などを明らかにすることにした。また、協同性に着目した長期の指導計画（以下期間計画と表示）を作成しながら、発達の見直しと、指導の在り方について検討することにした。

## 2. 研究の取り組み

### 2. 1. 研究の方法・内容

#### (1) 体験の多様性と関連性を重視した保育実践について

- ・保育記録の積み重ねに基づき、「幼児にとって体験のもつ意味」「稲作から広がる体験」「体験と表現」「3年間の育ちを見通した指導計画」について検討し、考察した。
- ・事例分析を通して、体験の内容や実態について、教師間の共通理解を図った。

#### (2) 協同性に着目した期間計画の作成について

- ・事例分析に先立ち、文献等から協同性に関する基礎的知識を教員間で共有した。
- ・事例分析を行い、幼児が他児とかかわる場面をとらえ、発達の様相、教師の援助、環境構成との関連を明らかにした。
- ・協同する幼児の姿と指導の在り方の関係性を考慮しながら、3年間を見通した期間計画を作成した。

### 2. 2. 研究の経過

#### (1) 定例の研究会

- ・週2回園内研究会実施。実践事例や期間計画の検討。(年40回)

#### (2) 保育検討会の日程および概要

- ・5/29 4・5歳児学年保育検討会 講師：聖心女子大学 河邊貴子先生
- ・6/11 公開保育検討会 助言：東京学芸大学 岩立京子先生 福元真由美先生  
立教女学院短期大学 田代幸代先生  
講演：聖心女子大学 河邊貴子先生
- ・11/20 3歳児学年保育検討会 講師：聖心女子大学 河邊貴子先生

## 3. 本年度の成果と今後の課題

### 3. 1. 成果

- ・専門分野の大学教員と連携を図りながら、体験の多様性と関連性の理解を深め、著書を通して公表した。
- ・事例分析や期間計画を作成し、協同する姿について教員間で共通理解を図った。

### 3. 2. 課題

- ・来年度は期間計画の検証を行い、加筆・修正すると共に、教育課程の見直しを行う。
- ・特別な配慮を要する幼児の個別指導計画を作成し、保護者との連携を図る。
- ・地域のモデル園をめざす。地域の幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、専門家等が集い、保育を検討する機会となるよう、年3回、保育を公開し、保育の充実を図る。

(文責：山崎奈美)

# 主体性を育む幼・小・中連携の教育

～実践に基づく連携カリキュラムの構想～

附属幼稚園（竹早園舎）

竹早地区「主体性を育む幼・小・中連携の教育（7年次）」の研究

（竹早地区幼小中連携の研究概要については、竹早小・中のページを参照）今年度は、幼小中合同研究会において、カリキュラムの作成に取り組んだ。幼稚園教員は、連携研究委員会、研究推進委員会に所属。

## 1. 幼小接続分科会の取り組み

幼稚園と、小学校1年生担任の教員が所属、「幼小連携カリキュラム（第1ステージ）の編成」をテーマに取り組んだ。

### 1. 1. これまでの取り組みと方法

平成19年度より作成している、幼小で共通の視点をもった「子どもの見とりと手だての表」を今年度も作成する。作成過程において、保育・活動研究会、交流活動、参観などを通して検討し、加筆修正を行う。また幼稚園と1年生の教育目標を見直し、「第1ステージの育てたい子ども像」と「各ステップのめあて」を設定する。

これらをもとに、幼小連携カリキュラム（ねらい一覧）を編成する。

### 1. 2. 内容

#### 1. 2. 1. 「第1ステージの育てたい子ども像」を設定する

幼小で同じ視点をもつ教育目標や学年目標をもとに、第1ステージの「やりたいことを思う存分やろうとする」という主体性を発揮する子どもの様相をふまえて、この3年半でどんな子どもを育てたいのかを明らかにする。

#### 1. 2. 2. 「ねらい一覧」を作成する

過去2年間の、3学年の「子どもの見とりと手だての表」に基づき、今年度の表を作成する。また時期ごとのねらいを3視点で分類し、各学年の姿から、加筆修正を行う。さらに「予想される活動例」として、毎年取り組むことが予想される活動例を表記することで、毎年のめやすとして活用できるカリキュラムづくりにつなげる。

#### 1. 2. 3. 実践研究の経過

参観（随時）、T-T（6/3 幼→小、6/5・8・22 小→幼）活動研究会 1年1組（6/25）、1年2組（12/8）、事前研究会（10/23）、実習生合同研究保育・授業（9. 10月）、交流活動（2月）等

### 1. 3. 成果と課題

「子ども像」や「ねらい一覧」ができたことで、幼小の教員が、第1ステージの期間を見通して、子どもを見とり、活動を考えることができるようになった。カリキュラムの核になる部分が形になったことは成果だが、活動をつくり、評価につながるいわゆる「内容」部分の整理やカリキュラムの構造そのものも課題である。また第2ステージ以降の教科カリキュラムとの関連についても検討が必要である。

## 2. 公開研究会

平成21年11月14日（土）に幼・小・中公開研究会「主体性を育む幼・小・中連携の教育」を行った。幼稚園教員は、実践研究部会の幼小接続分科会に所属し、好きな遊びの場面（4歳児、5歳児）の公開保育を行い、1年生と作成しているカリキュラムのつくりかたについて提案、協議した。

## 3. 園内研究会

今年度は、学年にわけて園内研を行い、それぞれ保育検討会をした。

1/22 5歳児（小金井園舎合同）、2/5 4歳児（講師：岩立京子先生）

## 4. 他学年との交流活動

中3生が幼児対象に、グループごとの「食育レッスン」（紙芝居やペープサートなど）後、弁当交流、5年生と5歳児の学校探検、給食交流などを行った。（文責：西澤 彩木）